

三島由紀夫『親切な機械』論

— 素材からのアプローチ —

高 場 秀 樹

一、はじめに

二、先行研究について

三、事件概要

四、三島由紀夫『親切な機械』の素材について

○ 創作ノートについて

○ 創作ノートからわかる三島が見た資料——新聞

○ 創作ノートからわかる三島が見た資料

——「先月の京都旅行で得た新資料」

五、『おぼろ夜の話』と『親切な機械』

六、おわりに

三島由紀夫の『親切な機械』（『風雪』一九四九（昭二四）・一一）を素材から観てみる。創作ノートから使った素材を探り、特に「後記」に書いてある「新資料」が何であるかを探りたい。ついで、新聞や雑誌を使って、主に人物の造形を、同じ事件を素材にした阿部知二の『おぼろ夜の話』（『新潮』一九四九（昭二四）・三）と比較しながら考察する。その結果、三島がこの作品で造形した人物のパターンは後に繰り返し三島文学の中に現われることがわかった。

一、はじめに

三島由紀夫の『親切な機械』（『風雪』一九四九〔昭二四〕・一一）と阿部知二の『おぼろ夜の話』（『新潮』一九四九〔昭二四〕・三）はともに、昭和二十三年四月に実際に京都で起きた事件を素材にしている。

『親切な機械』には初出当時から「後記」という一文が附されている。そこには、三島が京都へ取材旅行に行った際に、三島をして是非とも作品を書きたい衝動を起こさせた「新資料」を発見したことが記されている。本稿は、まず作者直筆の創作ノートの中から「新資料」に関する記述を検討した上で三島の見た資料が何かを探る。さらに、新聞記事、雑誌記事などから事件を洗い直し、『親切な機械』と『おぼろ夜の話』、両者の人物造形の違いを浮き彫りにした上で、『親切な機械』における「新資料」と、作品の人物造形との関係を探ることで作品を分析したい。

二、先行研究について

『親切な機械』を単独で論じた先行研究は管見に入った限り見あたらない。しかし、阿部知二の『おぼろ夜の話』との関係を論じたものであれば、

・内倉尚嗣『事件から小説へ——「おぼろ夜の話」と

「親切な機械」』（『阿部知二研究』一九九七〔平九〕・四）

が挙げられる。氏は新聞各紙、雑誌を丹念に調査された上で、同じ事件を素材とした二つの作品、阿部知二の『おぼろ夜』と『親切な機械』の事件から小説への造形方法の違いとその起因する所を考察したもので、前者を「戦後青年に対する作者の人道主義的な解釈によって造形されている」とし、後者を「犯人に対する同世代人としての共感」の上に造形されていると考察されている。

その他、単行本の中で触れられていたり、あるいは、何かの解説で言及されているものとしては、以下のものがある。

「戦後派」青年を親愛な同族として弁護した作品と受け止めた、

・山本健吉『日本文学全集68 三島由紀夫集』『解説』（一九五一〔昭二六〕・九 新潮社）

「その非合理的な示唆の正確さ、ある憑霊現象をテーマ」とした、とする、

・田中美代子『三島由紀夫短編全集 3』『月報4』（一九六五〔昭四〇〕・五 講談社）

「戦後という時代と作者の年齢自体が、憧れの夢想を不可能にし」、作中の悲劇を「イロニクな視線」でとらえた

とする、

・渡辺広士『岬にての物語』『解説』（一九七八〔昭五三〕・新潮文庫）

この作品の「破綻」の原因を木山という人物の介入に見、猪口の手紙の熱の入りように三島の当時の実人生の様相を見た、

・奥野健男『三島由紀夫伝説』『『青の時代』の予言』（一九九三〔平四〕・二一 新潮社）

があり、その他、

・ドナルド・キーン『日本の文学69 三島由紀夫』（一九六四〔昭三九〕・12 中央公論）

・吉村貞司『三島由紀夫の美と背徳』（一九六六〔昭四一〕・九 現文社）

・野口武彦『三島由紀夫の世界』（一九六八〔昭四三〕・二一 講談社）

などにこの作品への言及がある。

三、事件概要

昭和二十三年四月十四日の深夜、京都大学の女子学生が同大学の男子学生に殺される事件が起きた。事件の概要を『朝日新聞』の昭和二十三年四月十五日木曜日の記事で紹介すると、次の様になる。

・共学の門 に恋の刃

京大生 女子学生を殺す

【京都発】十四日朝三時ごろ菜切包丁を下げ血まみれになつた京大生が京都下京区綾小路派出所へ「恋人を殺した」と自首した、五条署で調べると同区室町通綾小路上ル岡直樹方京大文学部史学科三年井元勇（二六）で、同朝二時半ごろ同区室町通松原上ル漆器業谷口音八方に忍び込み長女の京大文学部美学科二年生八重子（二五）を起し、青酸カリを見せて心中を迫つたが断られたので持つていた菜切包丁で顔面、左乳をめつた切りにして殺したうえ自分もノドを突き自殺をはかつたが死に切れず飛出した

この事件はかなり衝撃的であつたらしく、京都という地方で起きた事件にもかかわらず、全国的に新聞で報じられた。事件が起きた京都の各地方紙では、当然大々的に報じられ、事件そのものだけではなく、特集記事や判決までの数回の公判についても報じられた。また、新聞だけではなく雑誌でも報じられた。

この「当時有名だつた女子大生殺し」事件（一九六五〔昭四五〕・五「あとがき」『三島由紀夫短篇全3』）は、それから約一年後、二人の小説家によって作品化されることになる。阿部知二の『おぼろ夜の話』（『新潮』一九四九

〔昭二四〕・三〕と三島由紀夫の『親切的な機械』（『風雪』一九四九〔昭二四〕・一一）である。^③

四、三島由紀夫『親切的な機械』と素材

○創作ノートについて

三島由紀夫がこの作品を創作する際、使った資料は何か。この問題を考える時、大きな手掛かりになるのは、創作ノートであろう。

最近、新潮社から新たに『決定版 三島由紀夫全集』が出版された。同じく新潮社から発売されていた旧全集との大きな違いは、全てではないが、各作品の創作ノートが末尾に附されたことであろう。その点、画期的な事であり、三島文学の研究がこの全集により一層進歩する事は間違いない。しかし、当然の事ではあるが、我々が一般に見る事の出来る創作ノートはすでに活字化され、印刷されたものである。作家の直筆の資料と、活字化され、印刷された資料との間には大きな違いが存在する。したがって、実際に直筆の資料を見ることで活字では見えない部分が見えてくるはずだ。そこで、今回、山梨県の山中湖にある「山中湖文学の森・三島由紀夫文学館」で、『親切的な機械』の作者直筆の創作ノート（ただしコピー）を閲覧させてもらった。『親切的な機械』の本文及び創作ノートは『決定版 三島由

紀夫全集17（二〇〇二〔平一四〕・四 新潮社 以下「決定版全集」とする）に収録されているが、その七九〇頁に次のような田中美代子氏による解説がある。

・創作ノートは、B5判二百字詰「世界文学社特選原稿用紙」三枚（一枚裏とも）とA4判四百字詰「スパルタ原稿紙」六枚のメモ。

以下、決定版全集に活字化されている創作ノート（以後これを「活字ノート」とする）及び前掲の田中氏の解説に、直筆の資料から活字では伝わらない要素を若干補足して行く。

活字ノートは大きく分けて二種類に分かれる。決定版全集ではこれを「【断片1】」と「【断片2】」に区別しているが、【断片1】の方が先の田中氏の解説で言及されていた「B5判二百字詰「世界文学社特選原稿用紙」三枚（一枚裏とも）」に相当し、【断片2】の方が「A4判四百字詰「スパルタ原稿紙」六枚のメモ。」に相当する。

さらに【断片1】を内訳すると、原稿三枚の内、一枚目表が決定版全集の七六二頁の最初から「（余白に（略）」まで、二枚目表が七六二頁の「第一回 五月二十二日（略）」から「八重子 実母くら（略）」まで、三枚目表が「第五回（略）」から七六三頁の「〇 praktische Wahrheit」まで、七六三頁の「人気講義 山内さんの純哲（略）」以後

(つまり注にある「朱書」の部分)は三枚目裏。しかもその下部に筆記されている。

さらに【断片1】の字の大きさや字体、筆記具に関して言えば、決定版全集の七六二頁の波線までは鉛筆と思われる筆記具で原稿の升目一杯に大きな字で、一行書いて一行空けるといった具合にバランス良く書かれている。ただし、朱書はペンで升目を無視して書かれている。そして、決定版全集七六三頁以後の箇所がペンで書かれ、更に、裏に書かれた「○哲学科倫理学専攻」以後の科目に関する記述は途中からインクが水分でばやけている(決定版全集の七六五頁に掲載されている写真のようなばやし)。

一方、【断片2】は大きく分けると六枚の内、A①から④まで番号が欄外に打たれている四枚の原稿と、B決定版全集の七七二頁「極秘」以後の部分、二枚とに分ける事が出来る。Bに関しては原稿二枚の内、一枚目は、決定版全集七七二頁の「極秘」から『甘党けしからんうまいぜんざい』京極妙心寺横」まで(ちなみに、「極秘」という部分は原稿の右欄外に書いてあり、「○大学教授恋愛事件」は太い字でその左横の枠線に書かれている)。残りの三行は原稿枠内に、右寄につめて記述しており、原稿の残り部分は空白である。そしてもう一枚は、「○大雲山竜安寺」以後の記述である。

字体や筆記具に関していうと、Aは決定版全集の七六五頁の写真にあるような字体で、筆記具はペンである。Bは【断片1】の最初のように鉛筆らしき筆記具で書かれている(ただし、「三島由紀夫文学館」で閲覧可能な資料は原本ではなく、複写した物なので字の色がわからない。したがって、【断片1】の最初の筆記具と同じかどうかは断定しかねる)。

○創作ノートから解る三島が見た資料

——新聞

さて、創作ノートの【断片2】の④(決定版全集七七〇頁)には次のような箇所がある。

・新聞に出ました、「ました」抹消

京都新聞	——	朝刊
京都日々	——	
都新聞	——	
夕刊京都	——	夕刊

これだけ見れば、三島が『京都新聞』、『京都日日新聞』、『都新聞』、『夕刊京都』を見た可能性があるということがわかる。

ところで、【断片1】の一枚目(決定版全集七六一頁)には次のような箇所がある。

・京大生、女子学生を殺す——結婚断られ無理心中にも失敗。

京都市下京区室町綾小路下ル岡直樹方 史学科西洋史

三回生 井元勇 (26)*

四月十四日午前二時半

室町高辻下ル悉皆業 谷口音八 八重子 (25)

刃渡り二寸五分の菜切包丁
五条署綾小路交番所

〔傍線、朱書。「去年」と朱書で注記〕

3月15日、一ト月

〔左右のプレス、朱書。次のように朱書で注記〕
何でもかんでも屋 湯のし、洗濯、染物——古
着更生、中京あたりに多し

〔括弧、朱書〕

〔略〕

〔余白に「23・4・15」という日付や数式などが記されている〕

〔引用者注・傍線は原文〕

この箇所は一目見て新聞の見出しであることが了解される

が、ここは作者の創作なのであろうか。それとも、実際にある新聞の見出しなのであろうか。そこで、先に挙げた四つの地方紙の見出しをみると、その中に次のような見出しがみられる。

・『都新聞』〔昭和23年4月15日 木曜日 第678号

〈2〉〕

京大生、女子学生を殺す

結婚断られ無理心中にも失敗

これを見れば、創作ノートの見出しは、『都新聞』の見出しであり、作者の創作ではなく、実在する新聞の見出しを使用したことがわかる。当然、作者はこの記事を確実に読んでいるだろうから、引用してみると、次のようになる。

・桜ちりはじめた十三日の深夜京大の若き一学生と同じ
京大に学ぶ女子学生に結婚を迫りはねつけられるや女子
大学生の若き生命を絶ち自分も自殺をはかった

京都市下京区室町綾小路下ル岡直樹方下宿人京大文学
部史学科西洋史二回生井元勇(二六)は十四日午前二
時半ごろ同区室町高辻下ル悉皆業谷口音八さん方裏べ
いをのり越え屋根伝いに侵入、二階で就寝中の長女八
重子さん(二五)を起して無理心中を迫ったが、拒絶
されるや馬乗りになつて所持の刃渡り二寸五分の菜切
包丁で八重子さんの頭部、顔面、乳上などメッタきり

に突刺し殺害したうえ自分ものをどを突いて自殺をはかったが、そのうち家人が騒ぎ出したので逃走、その足で五条署綾小路交番所に自首した

傍線部をみるとわかるように、『断片1』の一枚目の原稿は見出しのみならず全ての記述において『都新聞』を資料としていることがわかるであろう。

こうして『都新聞』から創作ノートに取り入れられた箇所は作品の末尾の箇所使用されることになる。

・「京大生、女子学生を殺す——結婚断られて」
かういふ大見出しが四月十四日の朝刊に載った。凶器は刃渡り二寸五分の菜切包丁であった。

(初出 四七頁下)

では、同じ『断片1』の二枚目から三枚目にかけて(厳密に言うとは決定版全集の七六二頁の波線まで)の公判の記録は何を参考にしたのだろうか。

注目すべきは第四回の公判を記述した箇所である。

・第四回 十月二十三日

山口健二(24)

井上美奈子(25)

角波京大事務官(34)(井元に関し、阿部知

二に事件の概要を述べた人

八重子 実母くら(57)

傍線部分の人物は正式には「角南」なのである。新聞、雑誌殆ど全てがこの表記である。しかし『都新聞』のみが「角波」と誤植をしている。

・井元第四回公判開く「世人の非難は甘受 八重子さんには済まない」

(略)

つづいて証人として井元の友人京大文学部学生山口健二君(二四)同井上美奈子さん(二五)京大学生補導部角波事務官(三四)八重子さんの実母くらさん(五七)の四名が出廷、八重子さんと井元の性格などにつき証言を行った

(昭和23年10月24日 日曜日(2))

傍線部では「京大学生補導部角波事務官」であり、創作ノートでは「角波京大事務官」となっており、若干の違いがあるが、この問題も直筆のノートをみれば解決できる。活字ノートの「京大」に相当する部分は直筆では挿入の記号で後から違う筆記具(ペン)で書き加えられているのである。つまり、当初は、資料とした『都新聞』の「京大学生補導部角波事務官」を参考にし、そこから「京大学生補導部」を取り、「角波事務官」としていたが、後から「京大」であることを筆記する必要を感じ、挿入記号で付け加えたのである。また、他の人物の名前、例えば、第五回の「府立

医大小南博士」、「京大村上助教」の双方が『都新聞』の〔昭和23年12月12日 日曜日 第918号（2）〕にある。

なお「大野弁ゴ人」や「精神カンテイ書」とカタカナの表記があることから、この箇所が聞き書きではないかという推測が成立する。つまり、速く書かなければならないので、画数の多い字をカタカナで済ませたという推測である。しかし、直筆の創作ノートをみれば、先に述べたように、この箇所は鉛筆のような筆記具で、太く大きな字でしっかりとバランス良く書かれている。この字の様子から聞き書きで書き流したような形跡を見ることは難しい。したがって、この箇所は何らかの資料を手元に置いて書き写したと見る方がより妥当であろう。

こうしてみると創作ノート【断片1】の原稿用紙一枚目から三枚目にかけての鉛筆のような筆記具で書かれた箇所、決定版全集と言うと七六二頁末の波線までの箇所は『都新聞』による事件報道の記事を複数、手元に置いて、しっかりと書かれたということが言えるだろう。

○創作ノートからわかる三島が見た資料

——「先月の京都旅行で得た新資料」

『親切な機械』の末尾には次のような「後記」が附いている。

・後記

この小説は、阿部知二氏の「おぼろ夜の話」（新潮三月号）が拠つたと思はれる一事件を素材にしてゐる。その事件に私が氏の小説が書かれる前から別種の興味を抱いてゐたのと共に、先月の京都旅行で得た新資料がこの作品を是非とも書きたい衝動を起させた。しかし資料は作品の内容としてはさして用ひられず、事件に対する見方の角度の決定のみに役立つた。事件といふものが一種の古典的性格をもつてゐることは、古典といふものが年月の経過と共に一種の事件的性格を帯びるのと似通つてゐる。事件も古典と同じやうに、さまざまの語り変へが可能である。この小説もその語り変への一つである。——ありうべき誤解にそなへて後記を書いた。

注目すべきは傍線部にある「先月の京都旅行で得た新資料」である。なぜなら、この資料こそが三島をしてこの作品を「是非とも書きたい衝動を起させた」のであり、この作品を読み解くキーとなり得るからである。

以下、この「新資料」が何か探つて行くのであるが、その前に、前提として明らかにしておかなければならないのはこの取材旅行の時期である。三島由紀夫の年譜で最も詳細と思われるのは安藤武の『三島由紀夫「日録」』（一九九

六〔平八〕・四 未知谷〕であるが、その昭和二十四年の「10月10日（月）」には

・「親切な機械」（雑誌「風雪」十一月号）——いわゆる最初の「社会ダネ」小説で、同志社大学女子学生殺人事件に取材し、京都へ取材旅行をした。

とあるが、この「10月10日（月）」は「親切な機械」の発表の時期であり、取材旅行の時期ではない。よって、取材旅行の時期は記されていない。「後記」には「先月」とある。これを顔面通り受け取ると、この文章が執筆された月より一ヶ月前ということなるが、執筆時期が解らないのでここから判断するのは不可能である。また、たとえ執筆時期がわかったとしても、数ヶ月前を「先月」ということもあるから、ここから判断することは難しい。そこで、手掛かりを与えてくれるのは創作ノートである。先述した創作ノート【断片2】のB（【断片2】の番号が打たれていない方）の二枚目、決定版全集でいうと七七二頁の「○大雲山竜安寺」以後には京都の有名な寺院が三つ記述されている。

・○大雲山竜安寺

五月の蛇

伝相阿弥作石庭 虎の児渡。

石14

○種油で塗つた壁。

○妙心寺の三時の鐘。（黄鐘調）

四つに分れた十五の石 中央の中高の石。
空間的に非ず。時間の象徴

○苔寺

芝生のミニアチュア。田の美と同じ ローンの美

デリケートなローン

○皐月花ざかり。

○青い馬の背をなでるやう。

○湘南亭。

○四条大宮——四条西大路 トロ・バス（無軌道電車）

傍線部からこの箇所が実際にそれらの寺院に訪れて目の前の状況を描写した記述であることがうかがえる。そこには三島が取材に行った時期を探る手掛かりがいくつかある。

「五月の蛇」と「皐月花ざかり」、また苔寺の苔が「芝生」のようになっているということである。このうち「五月の蛇」はそのまま「五月」とある。では、三島が取材に来たのは五月かというところ、断定できない。なぜなら次の「皐月花ざかり」とあるその皐月は、花が咲くのが六月頃なのである。よってこれら二つの時間を表す表現から推定できるのは、三島は昭和二十四年の五月か六月頃に取材に行ったと言えるだろう。

『文学』の昭和三十八年十一月号に発表された「わが創作方法」は三島が自作の創作過程を明らかにした文章であるが、そこには次のような記述がある。

・第一に主題を発見すること。

(略)

材料はどこにもころがつてゐるのである。ただ、或る時点における私の内的な欲求に、ぴつたり合ふ材料といふものはなかなかみつからない。私たち小説家は、懷中電灯を手にして暗闇の道を探して歩いてゐる人のやうなものだ。ある時、路上のビール瓶のかけらが、懷中電灯の光りを受けて強くきらめく。そのとき私は、材料と共に主題を発見したのである。

ある材料が私に及ぼす魅惑は、はじめのうちは何故それがそんなに魅力があるのかまるでわからないが、無意識のうちに、そのときの私の内的欲求が丁度それに相応するものを、その材料の中に見つけたからである。その不可解な魅力は、材料自体の属性であるといふよりも、私自身の内的欲求がそこへ投射されたものである。私はそこに、われしらず、一つの「主題」を発見したのである。

(本文は『三島由紀夫全集第三十一巻』一九七五(昭

五〇)・一一 新潮社)

この「材料」と「主題」の關係についての言説は、『親切な機械』における「新資料」についてもあてはまる。

京都に取材に行き、三島が「是非とも書きたい衝動を起させ」る「新資料」を発見した時、その資料は「或る時点における私の内的な欲求に、ぴつたり合ふ材料」であったのであり、三島は「材料と共に主題を発見したのである」。そして、その時の資料には三島自身の「内的欲求」が「投射」されているのだ。

かように、「新資料」はこの作品においてかなり重要な資料であることがわかるであらう。

では、内容面ではどうであらうか。この「後記」から伺えるのは同じ事件を素材とした阿部知二の『おぼろ夜の話』を強く意識しているということである。冒頭、いきなり阿部知二の『おぼろ夜の話』を持ち出していることや、「その事件に私が氏の小説が書かれる前から別種の興味を抱いてゐた」とか、「事件も古典と同じやうに、さまざまの語り変へが可能である。」といった記述をみれば、そのことは明かである。

また、当時の阿部知二と三島由紀夫の文壇における地位の違いや『おぼろ夜の話』と『親切な機械』の初出発表の雑誌、時期から三島の『おぼろ夜の話』に対する意識の有り様がわかる。⁶⁾

三島は『仮面の告白』（初版発行昭和二十四年七月）こそすでに発表してはいるものの、まだ文壇的な地位は阿部ほど確立されていitわけではなかった。そのことは発表された雑誌が『親切な機械』が『風雪』であるのに対して、『おぼろ夜の話』は『新潮』であることからわかる。しかも、両作品の発表時期は『おぼろ夜の話』が昭和二十四年の三月であるのに対して、『親切な機械』は同年の十一月である。すでに文壇的地位を確立したかなり有名な作家が、わずか八ヶ月前に同じ素材（それも、素材の事件自体、発生してから二年も経たないかなり有名な事件）で既に作品を発表しているのである。読者が『親切な機械』を読む際、『おぼろ夜の話』の印象を引きずるのは当然であろう。その事は三島自身、重々承知していたはずである。したがって、その時、三島の脳裏には次のような意識があったはずだ。すなわち、作家としてのオリジナリティーを保持するために、なるべく『おぼろ夜の話』から離れた印象の作品を書かなければならないと。そうした作品を描くには内容の次元においても『おぼろ夜の話』とは異なるエピソードを素材とする必要があったろう。おそらくは、京都への取材旅行は、作品に使うスケッチのためだけでなく、『おぼろ夜の話』には無い事件のエピソードを見つけるためでもあったはずだ。そうした意識の中で、京都への取材旅行

に実際に行き「新資料」をみつけた。そう考えると、この「新資料」の「新」しさは阿部知二の『おぼろ夜の話』には無い資料の新しさと言え、「新資料」には『おぼろ夜の話』には無い内容があるはずである。

「新資料」に関して、作品が書かれた後の「後記」そのものからわかることは以上であるが、では作品が書かれる以前の創作段階ではどうであろうか。そもそも、「新資料」は京都へ創作のための取材に行った際にみつけたものであり、その創作段階の京都取材に関して直接な手掛かりを与えてくれるのは、創作ノートであろう。

創作ノートには「阿部」に関する記述が二カ所みられる。すなわち、

・ 第四回 十月二十三日

山口健二（24）

井上美奈子（25）

角波京大事務官（34）（井元に関し、阿部知

二に事件の概要を述べた人）

八重子 実母くら（57）

（決定版全集七六二頁）

・ 井元事件（引用者注・原文は二重三角）

山口、京大入試の時、となりに坐つてゐた女の子（B）、試験場で知り合ふ 仲良くなり、女の子の友

達、井上、二人あるところに出会はずとやりきれぬほど甘い。井元あらはる。山口恋人といやになりかけ、さかんに二人をくつつけんとす。井元夢中になる。(小説のとほり)。(阿部書きおとし、「阿部書きおとし」抹消)——殺さうとして下宿へのりこむ。出刃「出刃」抹消 菜切庖丁つきつけた時、「姉さん」と叫ぶ。

(交番へ血だらけの刃をもち巡査追ひかけ交番へ入る。「お前は何だ」「俺は主体性を確立した」と叫ぶ)

自首か？ 捕縛か？——もめた。

美学

一昨年、京大

二月頃

(決定版全集七六七頁)

二つの内、特に重要なのは後者である。この「井元事件」と題された一文に記されているストーリーは、ほぼそのまま『親切な機械』に採り入れられることになる。一見すると先に述べた『おぼろ夜の話』からなるべく離れた印象を持つ作品を書かねばならないという意識は、「阿部書きおとし」という言葉に端的に現われているように見える。なぜなら、「阿部書きおとし」の上述の部分の何かを阿部は

『おぼろ夜の話』で書き落としているということになるからだ。

しかし、そう簡単に断定できないのは、その直後にこの言葉を抹消していることであろう。さらに、その上には、その言葉とは全く逆の意味を持つ「(小説のとほり)」という言葉がある。「(小説のとほり)」の「小説」が『おぼろ夜の話』を指す事は明かだが、その上の記述の何が『おぼろ夜の話』の「とほり」なのだろうか。『おぼろ夜の話』にはその上の文章と重なる部分はない。しかし、この後の「——殺さうとして下宿へのりこむ。」以後の殺害場面は『おぼろ夜の話』に描かれている(初出 八〇頁上)。おそらくは、この殺害場面を指して「(小説のとほり)」と筆記したのである。逆に「阿部かきおとし」は文字通り『おぼろ夜の話』に無い要素を指しているものであり、その直前までの箇所なのだ(「阿部かきおとし」を抹消した理由は後に考察する)。

『親切な機械』のメインストーリーであり、かつ、『おぼろ夜の話』には全面的には見られない最大要素はまさにこの箇所なのであり、先に述べたように新資料が『おぼろ夜の話』に全面的には見られない要素だとすれば、この箇所こそ、新資料の内容なのではないか。したがって、この「井元事件」と題された文章は何に拠って書かれたのか、

それこそが「新資料」の最大の手掛かりと成り得るはずだ。

まず、新聞を見てみよう。新聞報道を一通りみても、この部分に該当する内容を持った記事はみられない。ただ、この箇所に出てくる二人の人物、山口、井上なる人物に関してはわずかであるが、記事がある。だが、それは主に第四回公判に関する各紙の記事に証人の名前として登場するに過ぎず（このことは創作ノートの【断片1】の二枚目にも記述されている）、各人物の詳細な情報はみられない。二人は第四回公判の証人なのであるが、当然、その際の記録には彼等の証言があるはずであり、そこに有効な手掛かりがあるかもしれない。というより、そうした「裁判記録」こそが「新資料」である可能性は十分あり得る。

前掲の「わが創作方法」には、「ニュース種の小説であれば、裁判記録や警察の調書までしらべ上げ、全く架空の物語であつても、主要な登場人物に具体性を与へるために、その職業の細目、生活の細目を、念入りにしらべ上げる。」という箇所がある。この記述から、三島由紀夫は犯罪事件を素材とする際、その調書や裁判記録を調査するということがわかる。実際、『親切的な機械』の後であるが、『金閣寺』（『新潮』一九五六（昭三一）・一から同・十まで）では、執筆する際に調書や裁判記録を参考にしていた。したがって、この『親切的な機械』においても、可能性はある。三島

が京都に取材に來た事とこの事実を合わせて考えると京都で裁判記録や調書を閲覧に行った可能性は高く、文中出てくる「新資料」が裁判記録や調書である可能性は高い。しかし、事件が起きてから、すでに五十年以上経過している現在、この事件の裁判記録や調書そのものを見るのは不可能に近い。

ところが、事件が起きて一年ほど経過した後、この事件についての図書が発売されていた。それは『女子京大生殺し事件の真相——法廷記録から』と題する七十頁ほどの小冊子である。この事件の被告を弁護した大野熊雄氏が編集した物で、「大野公館」という所から発行されている（恐らくはこの名称からして自費出版に近いものではないか）。昭和二十四年七月二十日発行だが、小冊子の冒頭にある「序に代へて」によれば、『新日本新聞』紙上に掲載された記事をまとめたものらしい。したがって、初出はそれ以前ということになる。副題には「法廷記録」とあり、主に裁判の記録によって構成された図書だが、所謂「法廷記録」だけではなく、犯人が逮捕された直後の警察の調書や検察の調書、あるいは大野弁護士の「弁護要旨」などからも構成されている。おそらくはこの事件に関してこれ以上詳しい資料はないとおもわれる。

この図書に山口、井上兩人に関する記述はそれぞれ一カ

所ずつある。井上氏の記述に関しては「谷田Yとの交際を注意した」と題された記述で、これは先に触れた第四回公判の際の証言の一部である。

・次は井上証人

「京都府立第一高女を経て東京女子大を卒業し、二十年四月千重子さんとともに京大文学部哲学科に入学し、同じく美学を専攻しております。(略)谷田さんは哲学科の倫理専攻のYさんと親しくしているので注目されていました。何時も谷田と二人が一緒にいるということを二人から聞いたので、私は谷田さんに好意的にそのことを告げて注意したことがありました。

二人は恋愛的文でなく、単なる交際と思います。私は谷田さんが求婚を拒絶しなければ、こんな事件は起らなかったと思う。(略)

ここでは恐らく山口氏と思われる「Yさん」と被害者の関係が語られ、その関係は「恋愛的文でな」と証言されている。

山口氏に関しては

・彼女と親交のある学生の話

四月二十二日京大文学部哲学科倫理学専攻二回生Yが参考人として検事廷へ姿を現わした。このY君によって明かになった。次はY君の言である。

「私が谷田を知ったのは昨年入学試験当時、宿舍を捜していた時に京大農業経済科の学生中村君から寮に案内された時谷田の話をきかされ、ついで同じ哲学科へ入ったので知合ったのです。しかしその交際は親しい友人としてでありました。」

とあり、この引用文から山口氏が第一回公判の始まる前に、検事廷で取り調べを受けていることがわかるのであるが、ここでは、被害者と山口氏の関係は「友人」であると証言されている。また、このことに関して大々的に取り上げているのは『夕刊京都』の昭和二十三年四月二十四日(第705号)の第二面の記事である。

・哲学でも何でもなかつた 三角関係から嫉妬 女京大生殺しに新事実発見

同学の京大学生殺し事件は京都地検服部検事係りで犯人井元勇(二六)はじめ知人関係者をよんで殺害の動機等につき取調を進めているが二十二日被害者と最も親しかつたといわれる京大文学部倫理学科某(二四——特に名を秘す)を同検事が午前午後にわたり取調べたところ犯罪の動機は三角関係に似た男のしつとからであるという新事実が現われ、また独りである場合被害者谷口八重子さん(二五)を短刀で学内を追いまわした事実も明かになり理論ばかりで説得しようと

した知人、京大当局に対しきよう行の事前予防に遺憾なしとはいえないこともほぼ明かとなっている

右某君は横浜一中、一高を経て昨春京大に入学した秀才であるが、一年年下の同君に対して谷口さんは格別な好意を寄せ、はじめお互いに理論的対論で知合つたものが到底男には勝てずと判り途中から専ら友達としての女の感情から交際を深め同伴で京都付近のあらゆる名所を案内をしており、その後青年団関係で知り合つた井元が途中から割り込んだ訳で、昨年暮予定を早め井元が結婚を申込んで断られるや格別両君の間をしつ視するようになったもので、その後井元君の女を追回すのはますますこうじ授業中の谷口さんをねらつていたもので犯行直後の「理想型の女の偶像を妨害する彼女をたおした」という供述の中から経験の薄い共学の微妙な男女関係が現われている

「井元事件」と題された文章に最も近いのは『夕刊京都』の記事で特に後半部分であるが、いずれにしても、「井元事件」では被害者と山口氏との関係は「恋人」となっており、また山口氏が犯人と被害者を「くつつけ」ようとした事実もこれらの記事からは伺えない。ただ、可能性として考えられるのは『女子京大生殺し事件の真相——法廷記録から』の引用文も『夕刊京都』の記事も昭和二十三年の四

月二十二日に行われた山口氏の京都地検での取り調べを基にしており、その調書には「井元事件」に記された事実が書かれているのかも知れない。つまり、まだ在命の中山口氏や故人の名譽のために、図書や新聞報道が真実の報道をひかえたということである。そういう可能性を伺わせるのは『夕刊京都』の記事で「格別な好意を寄せ」とか、「友達としての女の感情」といった表現がみられるからである。

そうだとすると、「新資料」は昭和二十三年の四月二十二日に行われた山口氏の京都地検での調書ということが言える。もっとも「井元事件」と題された一文が事実であればの話で、これがフィクションであれば、調書も新聞報道や図書と同じ内容をもっており、より詳しい調書を「井元事件」の基にしたかも知れないのだ。

先に「井元事件」と題された一文で「阿部かきおとし」が抹消されていたことを指摘したが、その理由もこれら一連の事に関わる。一読では『おぼろ夜の話』には山口氏に該当する人物は見られないが、よく読むと、

・華江の部屋に入り、二人切りになると、保津は、石狩は郷里から帰ってきているが、心持はすこしも変つていないどころか、ますます激化している、と、まず注意した。

「知つてゐるわ。哲学の加古さんにきいたわ。」（略）

とある。この「加古」なる人物はこれっきり登場しない。たった一度、しかも会話の中にのみ登場する人物に何故名前をつけるのか。おそらく阿部は山口氏と被害者の関係を知っていたのではないか。それを明らかにせず、敢て示唆にとどめたのではないか。示唆にとどめた理由は前述の通りである。三島は「新資料」により、山口氏と被害者の関係を知った。そこでかねてから疑問に思っていた『おぼろ夜の話』の右の箇所を思い立った。そして、阿部が山口氏に関して完全には「かきおとし」ていない事に気がつき、「阿部かきおとし」を抹消したのではないか。

いずれにしても、「新資料」が山口氏、井上氏、犯人、被害者の四人の関係について記された資料であることは間違いないであろう。

五、『おぼろ夜の話』と『親切な機械』

『親切な機械』と『おぼろ夜の話』を比較すると、殆ど全く異なる作品であることがわかる。両作品の違いは様々な次元にわたっているが、特に注目したいのは、これまで考察してきた登場人物の違いである。

『おぼろ夜の話』の主要な登場人物は

- a、千曲華江 事件の被害者
- b、石狩雪彦 事件の加害者

c、保津清一 加害者の唯一の友人で能代の学校のイギリス文科の学生

d、能代 百合江から華江の護衛を頼まれる西洋史の先生

e、千曲百合江 被害者の姉

一方、『親切な機械』の主要な登場人物は

f、鉄子 事件の被害者

g、猪口 事件の加害者

h、木山勉 鉄子のかつての恋人

i、季子 木山の現恋人

両者の主要な登場人物を比較してみても重なるのは事件の加害者、被害者のみである。

主要登場人物に限って言えば、A『おぼろ夜の話』にあつて『親切な機械』に無い登場人物、B『親切な機械』にあつて、『おぼろ夜の話』に無い登場人物をそれぞれ考察すれば、各作品の特徴が浮き彫りになるだろう。

Aはc保津清一、d能代、e千曲百合江である。これら登場人物には実際のモデルがいるのだろうか。まずcであるが、保津精一は

・保津精一は、孤独な石狩にとつてのただ一人の友人といつてよろしい。彼が石狩を知つたのは、どちらも大学の一年のとき、——昭和十八年に召集されたときだ

つた。同じ中隊に属して南方に行つたあいだに、いっ
となく石狩の特異な性格に興味をもつようになった。

これは猪俣勉という人らしい。新聞各紙の報道でこの人物
の情報を挙げると、

・傍聴券を発行

井元京大生第二回公判

同じ大学に学ぶ女子学生を殺した京大生井元勇（二七）
にかゝる第二回公判は三日午前九時半から京都地裁瀬
谷裁判長係、服部検事立会で開廷、井元の私淑した京
大助教授井上智勇氏、学徒出陣で南方に従軍、終戦後
も一緒にあつた友人の猪俣勉（二七）成徳青年団長古
山新治の三氏が証人として出廷した、『都新聞』昭和
23年7月4日 日曜日 第758号）

とあつたり、他には「つぎに被告の唯一の親友谷大研究中
猪俣勉氏（二七）から『学内でも特異の存在で奇行も多か
つた』と述べ、」（『京都新聞』昭和23年7月4日 日曜日）、
「井元と学徒出陣へ従軍復員後も一緒にあつた谷大卒猪俣
勉君（二七）」（『夕刊京都』昭和23（1948）年7月3
日（土曜日）（2）第776号）、「次回七月三日には中学
時代の学友谷大研究生猪俣勉氏（岐阜県在住）」（『朝日新
聞』大阪版 昭和23年5月23日（日曜日）（二二））などがあ
る。

次に能代であるが、能代に関しては、

・やや年下の友人で二つの学校で西洋史を教えている能
代をたずねようとした。

・能代は、じつは千曲華江との事について自分は知つて
いるのだ、と告げ、もう少し高く広い面に立つて、こ
のことを客観視するために、しばらく旅行でもするな
り家に帰るなりしたらばどうだろう、

とあり、作中では石狩の考えを是正しようとした先生であ
る。この能代にも実在のモデルがある。それは井上智勇氏
である。

・かねて井元の行動に心配した学校当局では本年二月ご
ろ角南京大補導事務官、西洋史担当井上智勇助教授ら
が同君の反省を促していたもの、『毎日新聞』大阪版
昭和23年4月15日 木曜日）

念のために他の新聞を見ると、「井元の私しゆくした京大
西洋史の井上助教授が証言に立つことになつており、」（昭
和23年7月3日（土曜日）（2）第776号）などがある。
また、旅行を勧めたということも事実である。

・井上助教授証人として法廷に

鑑定中であつたが彼の第二回公判は七月三日開廷さ
れた。（略）

証人として京大史学科の井上助教授が法廷に立つた。

「自分が深く井上と接触したのは本年二月七日、京大補導課で角南氏とともに彼の心境をたじた時である。

その際は、自分が書綴った本年一月ごろよりの手記を読上げた。(略) 京都を暫く離れてよく反省せよ、

自ら進むべき路が開かれんと注意したところ、彼は暫らく旅行すると答えた。(大野熊雄編『女子京大生殺し事件の真相——法廷記録から』一九四九〔昭二四〕・

七 大野公館)

手記を読み上げたという事実も、『おぼろ夜の話』に採用されている。

次にe千曲百合江であるが、事件の被害者の家族について詳しいのは『週刊朝日』(昭和二三(一九四八)年五月二日号 曜日 一六頁)である。

・八重子さんは前記の住所で三十余年も悉皆業をいとなむ音八さん(六八)母くらさん(五七)の一人娘で、男の兄弟は音一さん(三七)富造さん(二二)晶三さん(一九)幸三さん(十七)と四人もあるが、(略)

ここからは姉の存在はわからない。ただ、『女子京大生殺し事件の真相——法廷記録から』には

・被害者兄の物語る井上とのいきさつ

なお音三は五条署で今西巡査部長に対して、父の代から呉服悉皆を業とし、現在地には二十年以前から住

んでいること、家族は九人である事などをのべたのち、(略)

と家族が九人あるとあるから、『週刊朝日』の記事にある人数が被害者の家族全員ではない事になる。したがって、その中に姉の存在があるという可能性が、この資料だけでは否定できない。『おぼろ夜の話』の殺害場面には被害者が「姉さん」と寝言を言う場面がある。

・華江は本を読みさしそのまま眠つたのか、室には灯がともつていた。彼はその枕元にべたりと座つて、およそ三十分ほど、その寝顔をみつめていた。(略)「姉さん」とつぜん、華江が寝ことをいい、うすく眼をひらいて寝返えりをうつた。

この場面は『京都新聞』のみが報道している。

・十四日午前二時二十分ごろ下京区室町通綾小路下る岡直樹さん方に下宿中の長崎県北松浦郡平戸町出身京大文学部史学科三回生井元勇(二六)が下京区室町高辻下る悉皆業谷口音八氏(六八)方裏物置から侵入、二階の中四畳半で寝ていた同家長女京大文学部美学科二回生八重子さん(二五)をゆり起し青酸カリをもつて無理心中をせまつたが「お姉さん」と騒がれやにわに懷中に持っていた肉切ぼうちようで八重子さんの顔、首、胸など七カ所をメツタ切りにして裏口から逃げ去

つた（『京都新聞』昭和23年4月15日 木曜日（2））
雑誌では『週刊朝日』が報道している。

・八重子は「嫂さん」と一声、兄音一さんの奥さんをよびました。（昭和二三（一九四八）年五月二日号 一六頁）

しかし、『週刊朝日』では血のつながった「姉」ではなく、兄の奥さんと呼んだ、となっている。したがって、以上の資料からだけでは血のつながった姉が実在したかどうかは確認できない。ただ、阿部知二はその姉の実在を、例えば戸籍などで確認して書いたのではなさそうなのである。というのも、次のような記述があるからだ。

・能代は、はじめから、この姉妹のちがいに驚いていた。（略）もちろん、性格の上にも、これ以上に大きな差があるのにちがいない。つまり、姉といつても、「兄の妻」ということなのか、それとも腹ちがいのなかだろう、とはじめは思った。

これは能代が初めて千曲百合江に会った時の印象である。この時、能代はあまりに姉妹が似ていないと思ったのだ。傍線部は『週刊朝日』と重なる。つまり、阿部は『週刊朝日』を見て、その上で「全く似ていないが血のつながった姉妹」を造形したのだ。逆に言うと、少なくとも阿部には被害者に血のつながった姉が実在していたという意識は無

かった。つまり、被害者の姉だけは少なくとも、阿部知二の意識では創作の人物であり、それだけ作者の作意が投影されていると言える⁸⁾。

被害者の姉はおくとして、他の殆どの登場人物が、モデルとして実在したことがわかる。また、登場人物に限らず全体的に『おぼろ夜の話』は事実⁹⁾に忠実であると言えよう。たとえば、作中展開される石狩の手記などはモデルとなった犯人、井元の手記を殆どそのまま引き写しているし、事件後の公判の様子も新聞の報道と重なる部分が多い。

では、『親切な機械』のBの方はどうであろうか。この点に関しては、先程から考察してきたように、h木山勉は山口氏がモデルと思われ、またi季子に関しては井上氏がそのモデルと推定できる。こう考えると、『親切な機械』の主要登場人物は実在していると言える。しかし、これらのモデルはモデルであって、その造形はあくまで作者の創造である。当然、事実と異なる部分は多くあるが、中でも注目すべき登場人物に関する最大の変更は、鉄子の性格である。作中で少なくとも木山から見た鉄子の性格は「鈍い」とされている。

・木山にいちばん鼻についてゐるのは、鉄子のこの種の鈍さだつた。かうした鈍さは体臭のやうに彼を追ひかけ、鉄子と顔を見合はせてゐるだけでも苦痛にさせる

のである。

では、モデルとなった被害者はどうであろう。

・また八重子さんの在学している京大文学部哲学科（美学）教授井島勉博士は語る

谷口さんは非常に頭のよい学生で奈良女高師卒業後舞鶴高女の教官をし、昨年優秀な成績で私のところへ入学し理知的で潔癖な女性であつた、恋愛などについては聞いていなかったし、それよりも勉強が大切だという性格であつたように思う、井元君との問題も全く無理に求められた一方的なものであるようにおもわれる（『都新聞』昭和23年4月15日 木曜日 第678号（2））

この記事には、被害者の性格は「理知的で潔癖」とあり、他紙でも同様な表現が散見される。こうした報道からわかるモデルの性格は作品の鉄子の〈愚鈍〉とも言うべき性格とはむしろ正反対といえる。これはやはり、作者の意図的な改変と見るべきであろう。では、その意図は。結論から言えば、鉄子を猪口のタイプに近づけるためであろう。思い切って図式化して表せば、 α （軽）木山、季子と β （重）猪口、鉄子の正反対の二組のカップルがこうして出来上がる。

作品の最初はこの α のカップルが β のカップルに対して

ある種の優越感をもつ。言い方を変えれば、 α のカップルの木山は β のカップルを軽蔑的に見ている。しかし、ある時点から木山の認識では捉えきれない〔何か〕が β のカップルに有ることを感じる。

・「私きつともうどうかされるわ。襲はれて強姦されるか、殺されるかどちらかだわ。（略）」

「己惚れだよ。己惚れるのは勝手だけど、猪口はどだいい人を殺すやうな奴ぢやないよ。（略）一体君は何を怖がつてるの？（略）」

鉄子の次の言葉は木山を唾然とさせた。

「根拠はちゃんあることよ。私がさうされたいとおもつてゐるからだわ」

（略）

木山の日記は、この頃鉄子がかへつたあとの、ふしぎな懊悩を記録した。一種新鮮な微妙な関係が猪口と鉄子の間に生れたことは確かである。愛でもないとするところの関係は何事なのか。意味深な目ませのやうな何かなのか。陰謀なのか。人知れぬ秘密の共感なのか。彼は寝苦しさに冴えた目で考へつづけた。何か彼に軽蔑できない謎が生れて来たやうに思はれる。猪口と鉄子のつながり合ひは彼を夢の中にまで追つたのである。

こうして、最後には殺人が起きるが、それが両者の合意で

あることが記されるのである。いわば、木山が嫉妬した α のカップルがその関係を完成させて、 β のカップルに勝利するのだ。

六、おわりに

α 的人間が β 的人間を最後に何らかの形でうち負かすといった、逆転劇の構図は後の三島の作品にも引き継がれる。例えば、『午後の曳航』の房子は α に属する人間であり、船乗りの龍二は β 的な人間といえる。また、『絹と明察』においては岡野が α 的な人間で、駒沢善次郎が β 的な人間と言える。

つまり、三島は『親切な機械』を創作した時点で、後に何度も繰り返し展開される事になるテーマを作品化していたのではなからうか。

そして、『親切な機械』に関して言えば、このテーマは α 、 β という二つのタイプのカップルの造形によってなされたのであり、その造形のきっかけを作ったのは、山口氏に関する「新資料」だったのである。

注

(1) 管見に入った限りではあるが、事件に関する文献を以下に挙げる。まず、新聞であるが、全国紙は『朝日新聞』、地方

紙は『京都新聞』(朝刊)、『京都日日新聞』(夕刊)、『都新聞』(夕刊)、『夕刊京都』(夕刊)の記事を種類別に分類して挙げる。いずれも昭和三年の記事。項目について若干説明すると、「社説」とは所謂「天声人語」類の記事など。「新事実」とは、他紙にはないスクープ記事。

一回目記事	朝日	京都	京都日日	都新聞	夕刊京都
社説	4・15	4・15	4・15	4・15	4・15
特集記事		4・16	4・23	(1) 4・16 (2) 4・16	4・16
新事実			4・17		4・16
放校処分		4・18		4・18	4・18
手記			4・22		4・24
起訴		4・23	4・25		
第一回公判		5・23	5・23	5・23	5・22 (予告)
精神鑑定				5・24	
第二回公判					7・3 (予告)
精神鑑定				5・24	
第二回公判		7・4		7・4	7・3 (予告)
精神鑑定再		9・12			
第三回公判		9・19	9・19		9・19
第四回公判		10・24	10・24		
第五回公判	12・12	12・12	12・12	10・24	12・12
判決	12・24	12・24	12・24	12・24	12・24
控訴				12・24	12・30

(2)『親切な機械』、『おぼろ夜の話』ともに本文は初出にする。また『おぼろ夜』の本文には、

・私も、その事件のことは、新聞などで読んで知っていたが、それがちょうど一年前の今夜のことだったとか、能代がそれに関係があったとか、ということとは、はじめて聞くことだった。(五八頁下)

という風に、旧仮名遣いと新仮名遣いが混在している箇所がある。こういった箇所は『おぼろ夜の話』全体に散見されるが、これら全ては原文のママである

(3)事前に文学館に申し出れば、「未公開資料リスト」掲載分に限り、誰でも閲覧可能。文学館についての詳しい情報は松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫事典』(二〇〇〇〔平二二・一一 勉誠出版〕の「三島由紀夫文学館」の項目を参照されたい。

(4)直筆の創作ノートでは見出しを書き写した箇所の右上の隅に「」が薄くではあるが、何回もなぞられて記されている。恐らくは引用である事を示しているのであろう。また、活字ノートの注に「〔余白に「23・4・15」という日付や数式などが記されている〕」とあるが(決定版全集の七六二頁)、この日付の書き方は直筆原稿では原稿用紙枠の上横線上の欄外に横書きで「23.4.15」と記されている。恐らくこれは新聞の日付を簡略化した形式なのであろう。以上のことからこの見出しが実在の記事の引用であることがわかる。

(5)『おぼろ夜の話』の末尾には「ことわり」という一文が附されている。

・ことわり——ある事件に暗示を得て書いたが、事件人物ともに、全く私の仮構の産物とみとめて下さい。

(6)三島の『おぼろ夜の話』についての言及としては、『おぼろ夜』について「『現代小説体系別冊2』『月報25』一九五〇(昭二五)・九 河出書房」がある。

(7)昭和二十三年当時の三島の作家的な印象を村松剛は「気のきいた短篇と切れ味のよい評論とをときたま書く小型の作家」(村松剛『三島由紀夫の世界』一九九〇〔平二二・五 新潮社〕と述べている。

(8)この点に関しては内倉尚嗣氏の「事件から小説へ——「おぼろ夜の話」と「親切な機械」——」に詳しい。

(9)『絹と明察』に関して三島は次のように語っている。

・「絹」(日本的なもの)の代表である駒沢が最後に「明察」の中で死ぬのに、岡野は逆にじめじめした絹的なものにひかれ、ここにドンデン返しがるわけです。

〔付記〕本稿を執筆するに際して、多くの人の御協力を賜りました。『女子京大生殺し事件の真相——法廷記録から』は山中剛史氏の御好意により拝見させて頂きました。氏は面識のない私にわざわざ複写を送って下さいました。誠にありがとうございます。

また、直筆の創作ノートを閲覧させて頂いた「三島由紀夫文学館」様、「都新聞」が神戸市立中央図書館に所蔵していることを教えて頂いた内倉尚嗣様に厚く御礼申し上げます。